

問題現場に行けば“リアル”がわかる？そこから何が変わるのか？！ ～平和学エクスポージャー(PSEP)ネットワークへの誘い～

報告者 横山正樹 (フェリス女学院大学)

1. はじめに

私は 1987 年から大学教育におけるアジア現地学習(実習)すなわち平和学エクスポージャー(PSEP)の実施に取り組んできた。勤務校からの参加者と地元学生・青年が各 1～2 名、合計 2～4 名の混成小チームを組み、社会問題の現場へ出かけて問題当事者たちと交流し、2～3 泊の住み込みを通して現実の一端を理解する、講義や印刷・映像教材を超えた直の体験だ。これには手間ひまも費用もかかり、危険性もあって、特段の対応が必要とされる。

立場の異なる各関係者にとり、そんな大変さに見合う成果はあったのだろうか。成果をどう把握すべきで、さらにどう工夫を重ねていくべきか、これまで試行しつつ考えてきたことを試案として提示したい。

エクスポージャーは個人でもグループでもなされている。ここでは私たちが手がけてきた PSEP など大学教育における現地学習等に限定して取り上げる。おもな主体は、①学習者、②現地受入関係者、そして③前二者間の仲介者(企画・運営関係者)の三者と考える。

学習者個人の変化・到達度を中心に考える従来主流の教育学的評価にとどまらず、ここでは各主体の織りなすネットワークがどう変化を遂げたか、遂げつつあるのか、関係性を重視した平和学的な考察を試みる。

2. エクスポージャー、またはフィールドワーク、社会調査実習等展開の実状と方法論

- ①応募参加者：(学習者)学生・院生をふくむ参加希望市民
- ②依頼受諾者：(受入関係者)地域の社会問題当事者・団体
- ③実施責任主体：(仲介者)大学・学会、NGO、旅行会社、企画・引率者/受入団体・個人
 - ・目的の多様性：主体ごとに意図された諸成果とそれ以外の諸結果(副産物)
 - ・団体行動型と分散行動型、地元側学習参加者の有無とその位置づけ
 - ・平和学的 5-Step 分析ワークシートの導入

3. 成果把握の方法論と実状

- ・従来の教育評価…①学習者成績評価→②授業(教員)評価→③実施機関(大学/団体)評価
まずは学習者個人の到達度が基本前提
- 平和学では個人の変化より関係性の変化に着目
- ・分散行動型エクスポージャーの二面性：グループワークとして vs. 個として
- ・平和に資する変化はあったのか、三者の関係性の変化、諸個人における変化
- ・対話を通じた相互の変化…メタな語り(再構成された語り＝笠井賢紀)
- ・関係性の持続と継承 SNS の活用と再訪・相互訪問機会の増加

4. “リアル”(現実)の曖昧化に対抗するエクスポージャー

- ・問題現場に行けば“リアル”(Reality 現実)が理解できるのか？ネット情報、マスコミ・図書・仮想現実 (VR)等による接近・体験とどう違うのか？そして何が変わるのか？
- ・何が現実か曖昧化され、ファクトが相対化される現代
- ・“リアル”とは何か、コストの問題、好み適合性の問題＝「不都合な真実」からの逃避…現実(への接近)が、しばしば(受容しがたいほどの)苦痛を伴う場合も

- ・現実のフレーミング問題：見る側の恣意性・立場(権力非対称)性、視(え)ない部分
- ・現実の信頼性(への反乱)問題：“ポスト真実”“フェイク(偽)ニュース”“オルタ・ファクト”、SNSによる情報拡散、ポスト“ポリコレ”(Political Correctness)、ポピュリズムや“反知性主義”批判(上から目線?)、マスコミの誤報や予測の外れ、情報源の偏り、パナマ文書開示、ウィキリークスやスノーデンショック
- 既存の国際レジームや主流メディアがタテマエ的な前提としていた規準
 - = 人権など西歐的価値への不信感や批判(恣意的な二重基準など)
 - = 公正さ・政治的正しさや大学における知の存立基盤への根本的な問い
 - として受けとめるべきでは…
- 現代社会の底流にある怒りと不安
 - ① 西歐的価値成立の基本的矛盾(豊かな社会実現とその条件としての植民地収奪)
 - ② グローバリズム進展による格差と環境破壊(=開発主義の問題性)の激化、没落へ?
 - ・人びとの分断ではなく分節化=articulation アーティキュレーションが進行
 - ・軍事化・民主制度の衰退・監視社会化・人びとの無力化/翼賛化・安全保障第一主義
- こうした状況に対抗するための有力手段としての平和学エクスポージャーの提唱
 - ・分節化への対抗=立場の違う人びとの分節状況を乗り越えたりアルな交流
 - ・対象を傷つける可能性、自分が傷つく可能性(厳し過ぎる現実を受けとめきれない)
 - ・現実についての語りをメタレベルで(再構成して)共同把握する可能性

5. おわりに～平和学エクスポージャー(PSEP)ネットワークへ～

- ・訪ねる=見る側と受け入れる=視られる側との非対称性→相互性・共同性へ
- ・一回性から継続性へ、多様な実施グループの相互経験交流へ
- ・社会から離床してグローバルに広がった市場経済を再び社会に埋め戻す、サブシステム志向の平和学(環境平和学的)課題への取り組み
- ・goodsの増大からbads(暴力)の縮減へ、開発主義・軍事化と人びとの分節化を超えた連帯へ
- 各大学や学会・NGO諸団体と協力してPSEPを推進していく、ゆるやかなネットワークへ、あなたも参加されませんか?

参考文献

- 笠井賢紀「問題発見・解決過程の語りと当事者性」『平和研究』37号、2011年、117-138頁
- グレッグ・ミッチェル、宮前ゆかり訳『ウィキリークスの時代』岩波書店、2011年
- 横山正樹「トランプ政権期からの環境・平和—環境平和学というチャレンジ」『新版 国際関係論へのファーストステップ』法律文化社、2017年、231-238頁
- 横山正樹「環境平和学としてのサブシステム論」郭洋春・戸崎純・横山正樹編『環境平和学—サブシステムの危機にどう立ち向かうのか—』(第11章)、法律文化社、2005年、217-239頁
- 横山正樹「大学を平和学する！」岡本三夫・横山正樹編『平和学のアジェンダ』(第9章)、法律文化社、2005年、163-189頁
- デイヴィッド・ライアン、田島泰彦・大塚一美・新津久美子訳『スノーデン・ショック—民主主義にひそむ監視の脅威』岩波書店、2016年